

252
469

薩摩琵琶歌

友

友

友
友
友



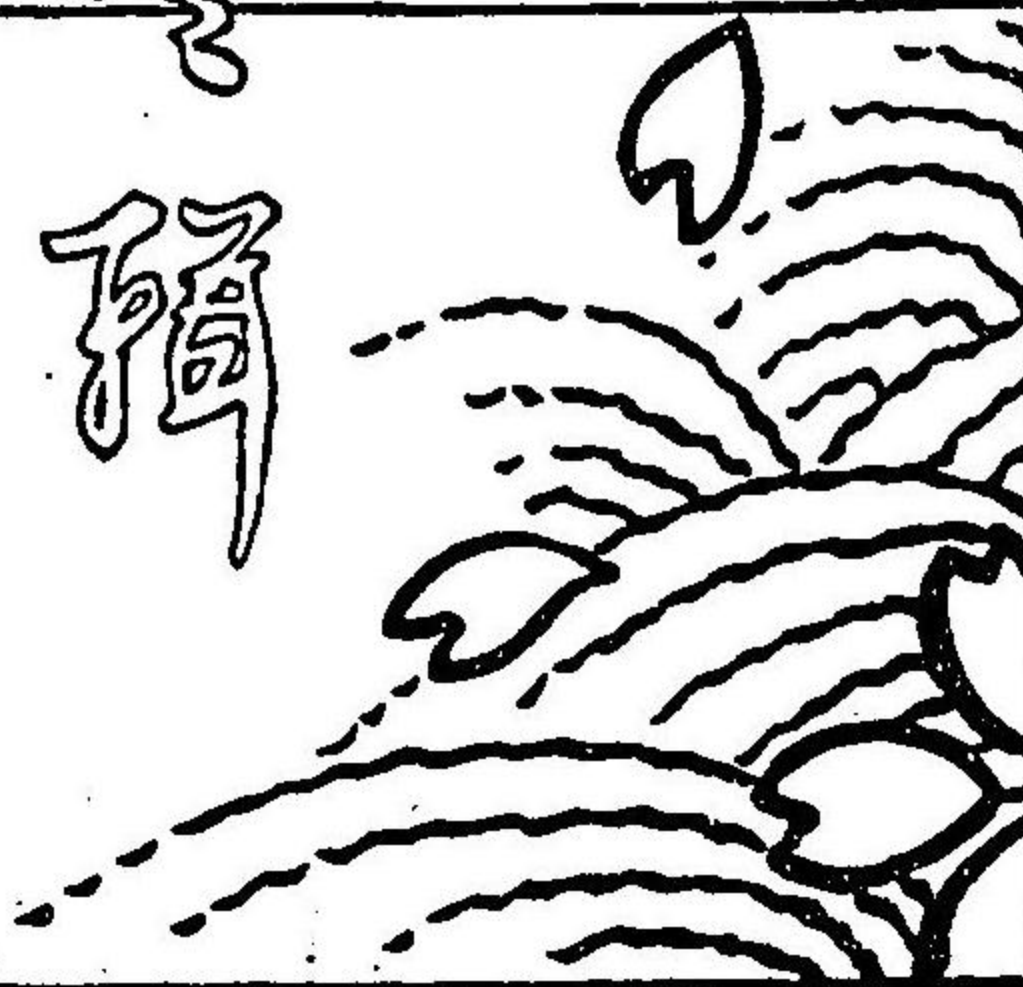
武藏野

雪の恨

常陸丸
頤

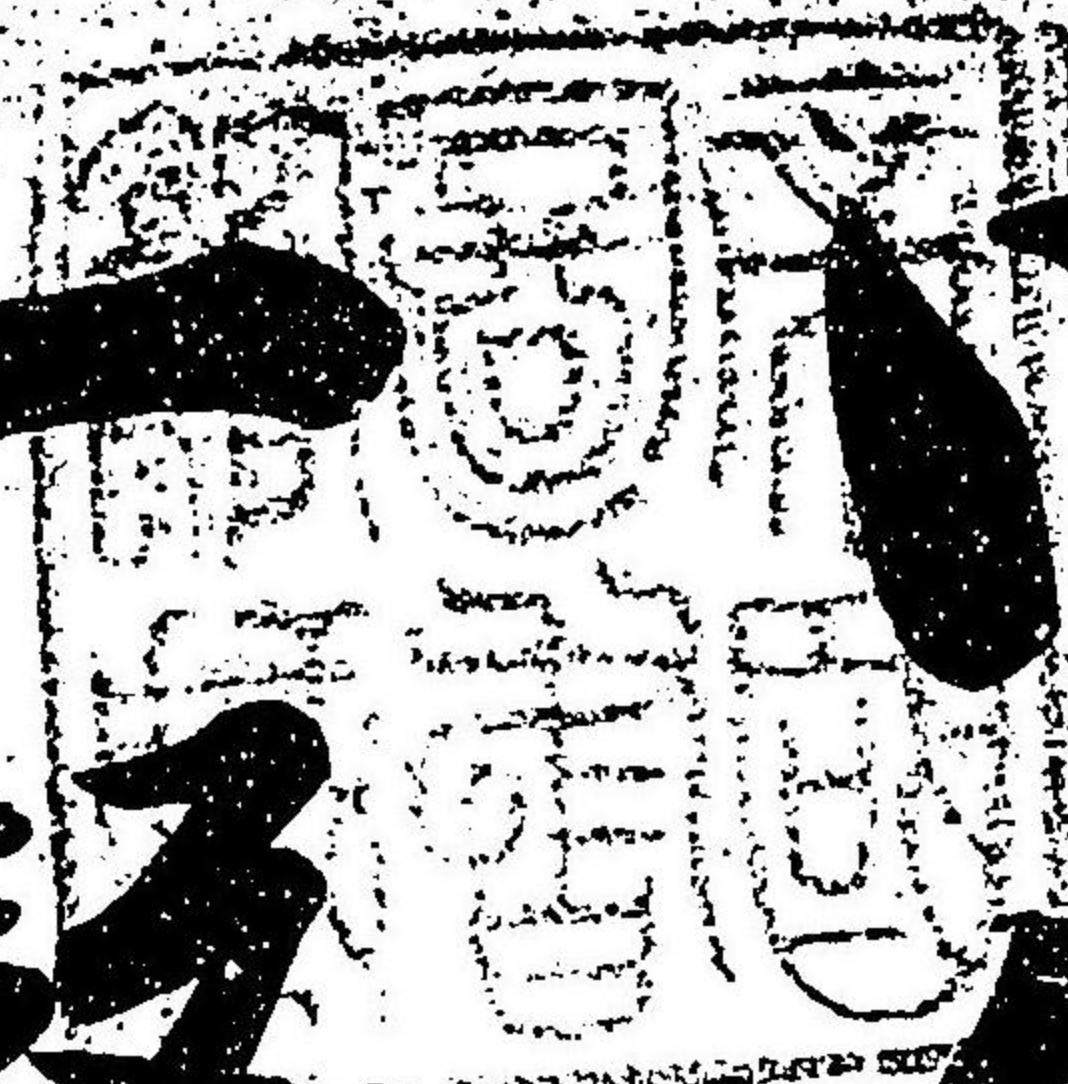
錦の御旗

閉塞隊



特 53

858



四德 一教

三德隨光顯

明治
39 8 13
内交

薩摩琵琶起因及主旨

薩摩琵琶ハ普通俗曲ノ類ニ非ズ然ル故
ニ其ノ技ハ遊藝視ス可カラズ抑モ起因
ハ今チ距ルユト三百有餘年前天正ノ頃
島津家中興ノ祖貴久公ノ生父相摸入道
日新公當時士風ノ萎靡シテ振ハザルヲ
嘆シ之ガ振興ノ策ヲ講ズルニ當リ自ラ
歌曲ヲ製シ琵琶ニ奏和セシメ修文講武
ノ傍ヲ士ヲシテ講習セシメタルニ靡然
トシテ勇壯活潑堅忍不拔ノ風ヲ興セリ
古來薩摩ノ地多ク有爲ノ士ヲ出シ所謂
薩摩武士ノ名天下ニ噴々タルモノ蓋シ
其ノ遺徳ニアラズトセズ夫レ薩摩琵琶
ハ其ノ音高雅優麗ニシテ而モ悲壯凜烈
ノ餘韻克ク鬼神ヲ泣カシム其ノ歌章ハ
忠孝義貞ノ徳教ヲ基トシ本邦歴史

中最モ著名ナル忠臣義士ノ偉勳ヲ叙シ
孝子貞婦ノ苦節ヲ述ブ而シテ謠譜語句
共ニ勇壯悲哀ナラザルハ莫シ其ノ亂戰
奮闘ノ狀ヲ吟ズルニ當リテハ聽者自ラ
奮激シテ髀肉ノ嘆ニ耐ヘザラシメ又孝
子烈婦ノ事蹟ヲ誦スルニ及ビテハ轉々
情緒ノ纏綿タルヲ覺ユ故ニ青年ヲシテ
之レヲ吟唱聽取セシムレバ音樂歌曲ト
シテ之レヲ樂ムノ間知ラズ識ラズ勇壯
活潑直往邁進ノ氣風ヲ養成シ艱難ニ遭
遇シテ撓マザルノ志操ヲ鞏固ナラシム
斯ノ如ク世ノ風教ヲ補翼スルコト大ナ
ルヲ以テ畏クモ叡聖文武ナル 天皇陛
下 皇太子殿下 ノ叡聞ニ達スルノ光
榮ヲ得シコト一再ナラザルナリ然シテ
堅忍不屈勇敢活潑ノ精神ハ其ノ地位職
業ノ如何ヲ問ハズ苟クモ身ヲ立テント

欲スル男子ノ缺ク可カラザル性格ナリ
文弱ノ弊ニ陷ルヲ防グコト斷シテ此ノ
右ニ出ルモノ無シ近時薩摩琵琶ノ盛ニ
世ニ迎ヘラル、所以ノモノ蓋シ其ノ意
ニ外ナラザル可シ本書刷行ノ主旨モ亦
是レナリ覽者請フ焉レヲ諒トセヨ

鹿兒島縣士族

佐々木彌吉郎述

謠ふ節の符號説明

○は地音。

●は地音の下。

下は謠ひ切りにて、中カンより起り、地にて止める

○は大カン

▲は中カン

●は吟がはり(腹の底より出し喉にて謠ふ。)

○は崩れ 一は聲音を引き、終りを上げる。

〵は聲音を下へ引く。一は平らに引く。

〵は聲音を少し上げて引き、終りを下ぐ。

一は大カン又は吟變りの止め。

〵は聲音を引き下げ、尙ほ終りを揺り下ぐ。

〵は聲音を引下げ、終りを浮け上る。

一は句と句とを切らずに、一氣に續くる。

各集第一歌の譜は充分に附け、第二歌より以下は引くこと揺ることを略す、故に謠ひ方は、第一歌の譜付けに由りて謠ひ、若し第一歌に吟がはり、崩れの譜無きものは、第二歌以下の部に於て、其の譜あるものを見て、推して知るべし、謠ふ規則は一定のもの故、第一歌の謠ひ方を、第二歌以下に移して謠へば、謠ひ方に適ふものなり。

薩摩 島 第一集

佐々木彌吉郎編纂作譜

島津日新公作

武藏野

武藏野に

草は種々多かれど

摘菜にすれば扱も少し。

皆人は若き時より

たゞ徒に日を暮す。

才智藝能なき人は、

寶の山に入ながら

空しく歸るが如くなり。

たまく此世に

人間衆生と生來て

眞如の玉を磨ずば

人と生れし甲斐も無し

人よりは淺く思はれて

只犬の老いたる如にて

朽果るこそ無念なれ

又何時の代の

何時の時に加磨らん

頼まれぬ代にもある哉月風

そよぐ草葉の露の身なれば

縦ひ高位長者の身となりて

七珍萬寶みちく

榮華に誇る樂みも

一夜の夢の如くなり

歡樂極りて哀傷多

古人の文にも記さる

さればにや

生々世々の樂みも

心の中の月や花

これを樂む人も無し

會者定離

生者必滅の代の習

春去り秋は蟬の聲

扱も果敢なき浮世哉

世の中を

思へば夢か稻妻の

ちらとする間の語も

慳貪愚痴は迷なり

嗚呼引寄せて

結べば草の庵にて

解れば原の野原なり

少しきを足りとも知れ

満ぬれば月も程なく虧めく

十六夜の空や

人の身の上と

知られたり

雪の恨

吉水經和氏作

四の緒に

調べ合て奏づるも

いと涙の種となる

昔語を尋ぬれば

今より七十餘年前

西の陞なる異國に

母子二人が雪の爲

往來もならで其母が

空しく屍を埋たる

いとも悲き物語り

あやめも分ぬ烏羽玉の

闇夜に道を踏違へ

果も無き迄いと廣き

野原に迷出しより

空かき暮し降雪に

左も右もあとさきも

皆銀の世となりて

樹々の梢は時ならぬ

花を散して木がらしの

音凄く身にしみて

骨も砕けむ許なり

玉と散來る傘の雪

拂へと積る身の因果

次第くに夜は更て

肌も凍り手も足も

かなはぬ時の神頼

今は命もたえなく

なりたる聲を紋上

助け賜はれ我神よ

たとひ妾は死るとも

此の兒は守り給へよと

言つゝ着物脱とりて

かはもき我が兒の身に纏ふ

雛を羽圍む夜の鶴

焼野の雉子の翼より

暖かなりき母の恩

知や知ずや幼兒は

眠ど母が玉の緒は

絶て最愛親と子が

永き別れとなりひやく

遠寺の鐘はそれとなく

諸行無常と告渡る

あくる朝に旅人が

雪かき分て辿り行

道に黄金の髪の毛の

亂しまでに兒を抱き

ひとりの女倒伏す

立寄見れば美しき

花の姿は残れども

浮世の夢は痕も無し

さて又夫は誰なるか

聞ば嘸かし歎らむ

彼はおもひ合すれば

涙は袖の關越えて

落る下より餘念なき

小兒は見上打笑みて

我母なりと思ひけむ

かへでの如き手を出て

乳房を探る其様は

胸も張裂く許なり

嗚呼親子の哀さを

語るまにく四の緒の

半の月も曇りけり

半の月も曇りけり

常陸丸

池邊義象氏作

六

征露の軍やうくに 進みくつて南山の
險阻も既に打破り 音に聞へし要害の
旅順口も閉ざれて、 鷺の棲てふ滿洲も
君が御稜威の旗風に 今[△]は靡かぬ草も無し
心つくしの島離れ、 玄海灘のただ中に
吹汐風に日の丸の 旗翻へす常陸丸
佐渡も續きてすゝみ行、 船路の果は遠からむ
何を荒ふる荒汐の 逆巻く中の黒煙
只一筋に走り來て 我を取まく敵の艦
コハ何事と言ふ間無 亂射亂擊雨あられ
進み遁ん隙もなし 千里を走る猛獸も

水に入ては如何にせむ 萬里をかける大鵬も
浪には翼折ぬべし、 心許ははやれども、
運送船の悲しさは 進退こゝに谷りて
せん方なくも敵艦に まかせはてしぞ是非もなき
佐渡はいかにと眺れば 霧にへだより分ぬども
同じ様なる運の末 輸送指揮官須知中佐
是迄なりとや思ひけん 大久保少尉の捧たる
聯隊旗をば手に受て 都の方を伏し拜み
火を放てぞ焼たれば 各將校もとりぐに
貴重品の焼捨ぬ、 この有様を打見つゝ
中佐は軍刀拔放ち 無念の涙はらくと
おつるを袖にうち拂 萬歳唱へ悠々と

七

腹かき切つてぞうせにける

つらなる將校始とし。

下士兵卒に至る迄

同じ枕に伏もあり

海に投じて死もあり

敵彈ますく加はれば

甲板上は忽まちに

屍の山を築きつゝ。

流る血汐に玄海の

浪は朱にぞ染にける

哀はかなや常陸丸

君萬歳の聲細く

我忠勇の將士等が

無限の恨うち乗て

潮の泡とぞ消にしは

明治三十まり七年の

水無月十五日の暮つかた

夕日は浪に落されど

霧たち覆ふ海原は

あやめも分かぬばかりなり

げに忠烈の武士が

十年の間朝夕に

磨たへし日本刀

試さん敵を前に見て

遺恨の刃一太刀も

報む事もなく許り

駒の蹄に満洲を

踏みにじらむも夢なれや

ウラルバイカル打ち越えて

あらましこともまぼろしか

思ば無念の極なり

吁一聯隊の我勇士

水積屍と消しかど

國に殉せし大和男が

清き其名は世々に

響き灘に立つ波の

絶る時なく仰れて

末まで遠く流らん

錦の御旗

坂 正臣氏作

天照す日の影うつる

眞名井の流末清く

瑞穂の國は昔より

武勇忠義の人多し

元弘年中の頃かよ

後醍醐帝の三の皇子

大塔宮と聞へしは

出家の身にてましませど

父の御爲め國の爲

義兵を擧て逆臣を

征伐せんとの御企

早くも賊へ洩しかば

四方の備へ嚴くて

比叡の奥にも南都にも

身を置給ふ事難く

熊野をさして落ち給ふ

股肱の臣は誰々ぞ

赤松律師光林坊

木寺の相模三河坊

片岡八郎武藏坊

平賀の三郎矢田彦七

村上義光の九人にて

柿の衣に笈を負ひ

兜巾眉深に被りて

先達つくりて山伏の

熊野詣に装ひたり

龍樓鳳闕に人となり

輕軒香車を出まさぬ

雲上人の御歩行の

長途いかにと御供の人々

危く思ひしに

社々の御祈り

宿りくの御勤め

つゆも怠り給はねば

勤従をつめる山伏も

見咎むるもの更らに無し

由良の湊を見渡せば

沖漕ぐ船の楫をたえ

浦の濱木綿幾重とも

知ぬ波路に鳴く千鳥

紀の路の遠山渺々と

薄紫の藤代の

松に掛れる磯の月

和歌吹上の浦かけて

月に磨ける玉津島

光をよそに伏拜み

長汀曲浦の旅の路

心を碎く習ひなり

雨を含る孤村の樹

夕を送る遠寺の鐘

哀を催す黄昏に

切目の王子に着給ひ

叢祠に袖を片しきて

朝家の榮を祈ます

斯くて十津川の戸野兵衛

竹原八郎にたよりて

暫し居たまへど ころにも長く在かねて

高野の方へと落給ふ 爰に妹が瀬庄司とて

賊に一味の士の 宮をさへへて申様

此道通し申しなば 鎌倉よりや罪せられん

さには言宮に弓引は いかにも畏多ければ

錦の御旗賜はるか さなくば一人の御供を止て

證據にせんと言ふ 股肱の臣を一人だに

いかでか殘給べき せん方なくも御旗を

彼に與へて虎の口 僅に遁れ給ひけり

斯るところに 村上の彦四郎義光は

草鞋の緒や斷にけん 遙に後たりしかば

宮に追付申さんと 足疾過る折しもあれ

ハタと庄司に行逢り 家人の持る旗見ば

正く錦の御旗なり 不審に思ひ尋れば

事云々と答ふるに 村上之を聞もあへず

くわつと怒て打腕 こはそも如何に何事ぞ

かたじけなくも畏も 四海の主人に御坐す

天子の御子 朝敵を追伐あらん其爲めに

御門出の道なるに 汝等ごとき下郎輩

かゝる舉動すべきかと 持たる御旗を奪取

大の男を搔攪み 四五丈許投たるは

獅々の暴しに異ならず 此怪力に恐れけん

妹が瀬庄司一言も 半句も無てすくみけり

義光は御旗を肩に懸け 程もなく宮に追付

御前にひれ伏し

事の由を具さに申上しかば

宮は御喜び

古しへの北宮勳が勇氣にも

立勝りと愛ましぬ

勇のみならず義光は

吉野の奥の戦ひに

宮に代りて討死し

御旗に打たる日月と

光争ふ忠臣と

義士とたゞへて萬代の

君に仕ふる人臣の

鏡とこそは仰るれ

鏡とこそは仰るれ

閉塞隊 初段

西村天四居士作

草も木も

大御旗手に打靡き

敵の東洋艦隊は

港内深く潜伏し

要塞の下を出ざれば

東郷司令長官は

旅順口を閉塞し

海上權を制せんと

決死の士をぞ募らるゝ

忠勇無比なる海軍の

將卒これを聞よりも

身を棄て國に報んは

今此時を遅れじと

我もくと名乗出で

其數二千に餘たり

中にも林兵曹が

赤き心を染たりし

血書の願文畏くも

乙夜の覽にぞ入にける

思ても見よ諸人よ

敵前ふかく奮進し

我と我船を没べき

此の至難の大任に

一呼二千の死士を得し

我日の本の軍人は

世界に類よもあらじ

東郷長官之を見て

嗚呼健氣なりさりながら

編制限あればとて

七十七士を選れたり

其の人々は誰々ぞ

有馬中佐に廣瀬少佐

齊藤正木兩大尉

島崎中尉を指揮官に

山賀、栗田、南澤

大石、杉の機關士以下

一人當千の勇士精兵

五隻の運送船隊に

十五六人づゝ乗組めり

旗艦に起る軍樂の

劉曉たる其の響き

浪の鼓と相和して

悲壯言ん方も無く

各艦齊く呼ふなり

萬歳の聲に送られて

旅順さしてぞ出でにける

行も送るも是ぞ此

一期の別と人知ぬ

涙や心に流るらん

頃は二月二十四日

午前三時半とかや

月西山に落ちて

海原暗き折もこそあれ

特別運送船隊は

五隻の舳艦相銜み

全速力にて突進す

すはや敵艦來襲と

あはてふためく敵軍は

探海燈を振り照し

世にも名高き天險の

旅順港口に聳つる

老虎尾老鐵饅頭山

黄金山の各砲臺

筒先揃へて打出す

砲聲天地を震動し

弾は霰かしら波の

逆卷く中を事ともせず

やまと雄心ふり起し

無二無三に進み入る

敵はあなやと驚きて

砲臺軍艦力を協せ

此處を詮度と亂射する

十字砲火の凄じさ

砲彈雨の注ぐに似て

五隻の隊員一人も

助かるべうは無かりけり

砲火は物の數ならぬ

闇路を迷す火光には

流石に敵せんやうも無く

第一番の天津丸

探海燈に誤られ

坐礁せしよ爆沈す

續いて進む武州丸

舵を打れて破壊せり

第三番は武陽丸

敵弾蜂の巢の如く

進みかねて沈没す

残るは報國仁川丸

辛も目的の港口に

進むと見る間もあらばこそ

レトヅキザンの砲弾に

報國丸は火事起り

憫れや擱岩沈没し

仁川丸も其わきに

爆發して沈みしは

一壯烈言ん方ぞ無き

こゝに水雷艇隊は

閉塞隊員収容の

任務を帯てよもすがら

敵前砲火に暴露して

ボートに取乗り逃れくる

數多の勇士を救上げ

難なく艦隊に合せしは

仁とや言ん我軍の

死傷僅に四人にて

其の餘は總て無事なるは

天祐とこそ謂べけれ

傳へ聞く

サンチャゴ封鎖の其時に

ホブサン大尉が率ゐつる

決死隊の武勇にも

勝れる七十七士の

譽は世々に傳らん

譽は世々に傳らん

明治三十九年八月十日印刷
明治三十九年八月十五日發行

編輯兼
作譜者

佐々木彌吉郎

不許

發行者

石塚猪男藏

複製

大阪市東區安土町四丁目三十番屋敷

大阪市西區阿波座二番町一番地

印刷者

堀

越

幸

第一集

武藏野、雪の恨、錦の御旗

常陸丸、

閉塞隊、

初段

第二集

櫻狩、

城山、

王昭君

川中島、

那須與市、

第三集

敷島、

蓬萊山、

母の誠

臺灣入、

小敦盛、

初段

第四集

春の調、

奇縁、

似

我

墨繪、

威海衛、

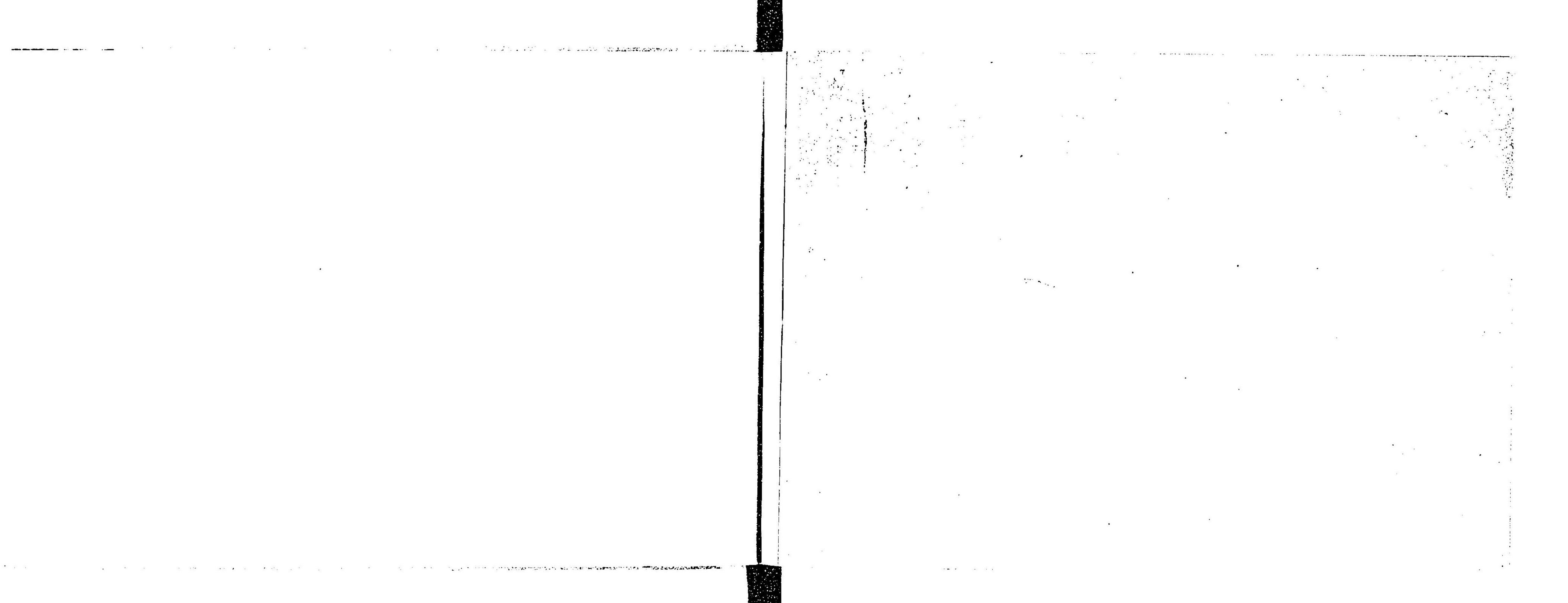
第五集

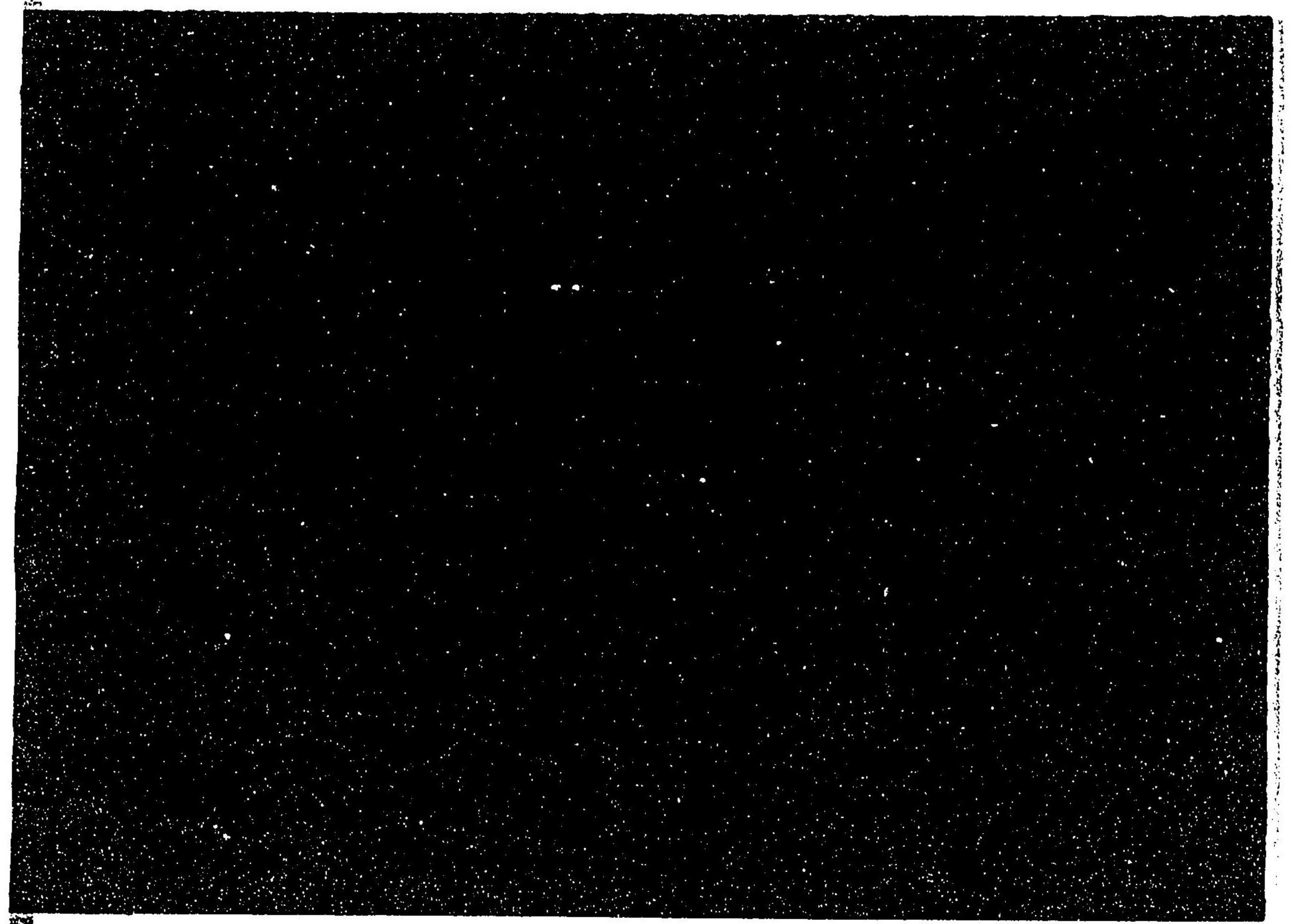
石童丸、

本能寺、

吉野落

初段





特53

858

敷島

第一編

国立国会図書館

074629-001-4

特53-858

薩摩琵琶うた敷島 第1, 3集

佐々木 弥吉郎 / 編・作曲

M39

CEJ-0132

